（5）　ルクセンブルグへ、旅行中の家族が病気になったから行く

３年４組

ベルギー、フランス、ドイツに囲まれた小国ルクセンブルグは川沿いの深い渓谷と緑の森といった豊な自然に囲まれている。川ではカヌーやキャンプを楽しんでいる人、木々の間をサイクリングする人など、のんびりとバカンスをすぐ人々の姿が印象的な国。

首都　ルクセンブルグ

人口　４１万２８００人

面積　２５８６平方キロメートル

人種　ゲルマン系

言語　ルクセンブルグ語　フランス語　ドイツ語

宗教　キリスト教

元首　アンリ大公

通貨　ユーロ

時差　日本より８時間遅れている

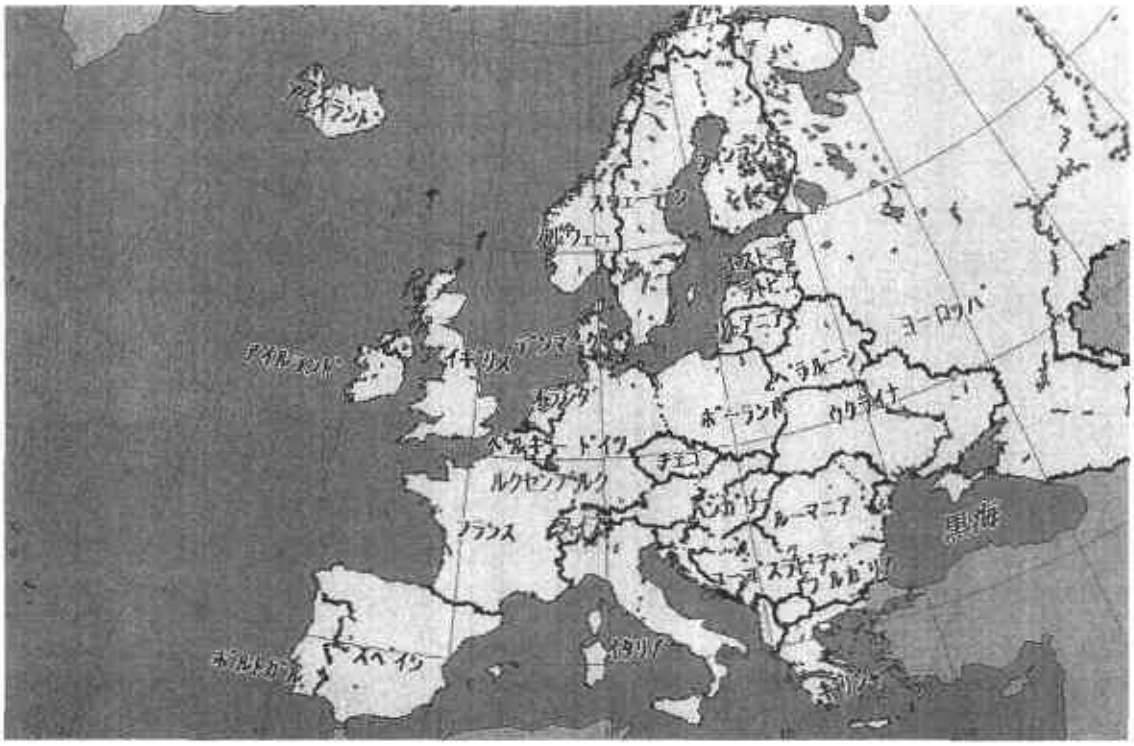
気候　４～５月は観光シーズンの始まる時期だがこの季節は聞こうも変わりやすいので気温は真夏でも２３度ぐらいでカラっと乾燥していて気持ちがいい。
高緯度にあるため夜の９時頃まで明るいので観光できる時間も長い。１年を通じて天気が変わりやすい。

病気になったら　在住者はホームドクター予約制だが旅行者であればどこでも診療してくれる。緊急の場合は救急車を呼ぶか２４時間あいてる病院へ。医薬分業制のため薬は薬局で調合してもらう。

ルクセンブルグに

☆家族が病気になったから行く☆

３年４組☆☆



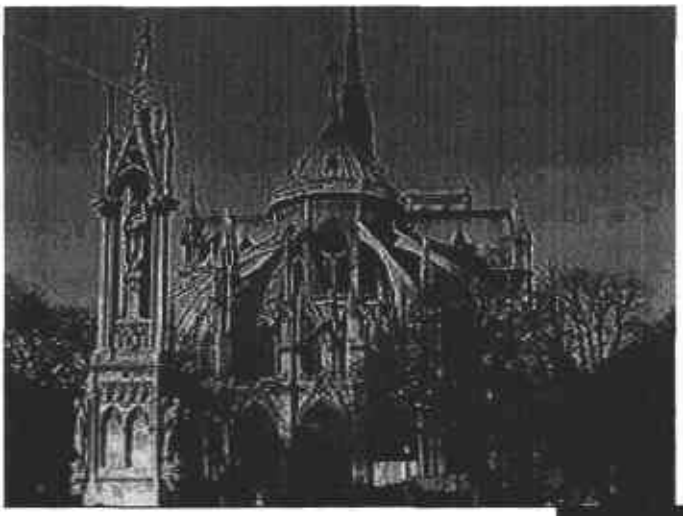
妹が夏休みにルクセンブルグに１人旅に出たけど、病気になったみたいだから来てほしいと電話が来て私がルクセンブルグまで行った。

日本から直行便はないのでフランスから陸路で入国した。空港からＲＥＲ－Ｂ（電車）に乗って、ルクセンブルグ駅で降りて、駅を出て、道の向こうにルクセンブルグ公園があって、公園に面して建つ妹が泊まってるＬＥ ＲＯＹＡＬ（ル　ロワイヤル）ホテルに行った。旅行者なら、ホームドクターを呼んで診察してもらえるので、ホテルの人に片言のフランス語で頼んでホームドクターを呼んでもらって診察してもらったらホームドクターが日本語で診察結果を伝えてくれてただの風邪だとわかった。風邪は２日で治った。

３日目、２人でノートルダム寺院を探しながら歩いた。ノートルダム寺院を見つけてそこを抜けて大公官を捜し歩いたかど、なかなかみつからないので、道を聞こうと思っても観光客自体がほとんどいない。でも、全く逆の方向に歩いていたらしく、２、３回ころ教会を拠点に歩いたあとでようやく、大公官にでることができた。大公官には、観光客がいっぱいいて、ここからダルム広場の方に歩いていくとお土産物屋さんやレストランもいっぱいあった。レストランに入ったけど、メニューは全部フランス語でかいてあって、注文するのも大変だと思ったけど、この辺は、観光客が多いので定員さんが少し日本語が話せる人で注文するのはそんなに大変じゃなかった。ご飯をたべたあと、国立歴史・美術博物館

に行ってみた。広くて見ごたえがあった。

４日目、今日は、ルクセンブルグの田舎の方にいくことにした。電車に乗ろうと思って切符を買おうとしたけど、全部、フランス語でわからなくて戸惑っていたら、後ろにいた観光客の人が切符の買い方をおしえてくれた。
電車にのってエテルブルッグという駅でおりて、それからバスに乗りビアンテというところにつくと、観光客の人が「この坂を登るとお城があるよ。」と教えてくれたので、お礼を言ってバスから降りた。急な坂を結構歩いてやっと到着した。中は普通のお城で展示内容が豊富なので結構たのしめた。見る所はこのお城しかないので、お昼をたべてからクレルボーまでいった。クレルボーはさびれた温泉街みたいな所だった。クレルボー城に行くとたくさんの人がいたけど、クレルボー城の中には入れなかった。クレルボー駅からルクセンブルグ駅に到着し、ホテルにもどった。
５日目、空港に行って飛行機に乗って日本に帰った。



ノートルダム寺院

ノートルダム寺院のステンドグラス

（6）　ネパールへ、自分の結婚式に行く（相手がその国の人）
3年5組

ネパールについて

人口；一番新しい人口統計 → 一千万人を突破
食べ物；じゃがいも、豆、魚

宗教；ヒンズー教（山地風ヒンズー教）様々なグループに分かれている

服；薄い布切れを体に巻いている、赤っぽい物が多い

語；ネパール語（地域の民族によって言葉が異なる）

周囲環境；全体を含め、見渡す限りの水田、険しい山がたくさんある、段になった地形である。
町の雰囲気；人との交流を楽しみの一つと考えているので、ダンスや音楽などを好む。
基本的に頭で物を運ぶ。
夫婦関係は地域によって上下関係がある所と無い所がある。

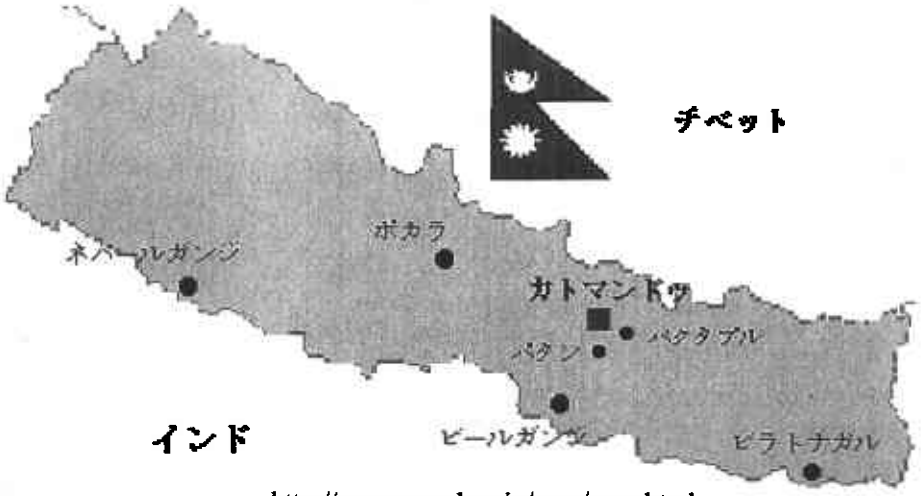
国の特徴；インドと同じカースト制度。
段になった地形で、階級によって住む場所が分かれている。羊を皆飼っている。
町や村は、寺院を中心にできている。
民族が多数である。そのため民族の特徴は様々。
中でもタカリー族は一番教育にお金をつぎ込む。
そば粉もある。９月は一年のうち一番貴重なダサインの祭の日である。

民族；チベット、ビルマ系の諸民族３０以上の民族が暮らす。

通貨；１ルピー当たり１．５５円

時期；６月から８月までの３ヶ月間雨期で、９月から翌年の５月までが乾期。
乾期の時は外がとてもほこりっぽい。

気温；４月から９月にかけて半年はほぼ同じ２７度から３０度。
１０月から翌年の４月頃までほとんど毎日晴天。



http://www.nepal.co.jp/map/map.html

東京からネパールまでの行き方；
東京から大阪の関西国際空港→直行便ロイヤルネパール空港へ。
ネパールの首都カトマンズ発は火曜日と土曜日。
　上海経由で９時間かけてカトマンズへ到着。昼過ぎにでれば夜到着

往復料金；１０万から１５万
旅の予算；１日当たり１０００ルピーから１５００ルピー

マガール族、タカリー族の結婚について
マガール族、タカリー族の間には、略奪を模擬した結婚の風習がある。結婚したいと思っている男性は、まず自分の両親と彼女の両親との間で話し合いをさせて下話はつける。この風習では、決して娘に縁談があったことは言わない。一方男性の方は、突然彼女の家を襲い、娘をとらえる。一味徒党を集めて。娘両親はあわてふためいたふりをして、どこかへ逃げてしまう、一方男性のほうは娘を捕らえる。これは女性の意志を無視した行動のようにもおもわれるが、きちんとした女性の自由を保証した制度なのである。村には密かに娘組というものがあり、秘密スパイを張り巡らせている。例えば娘組のお気に入りの青年を、ダンスなどの先生にしている、彼らも男性側情報をとらえる情報源でもあるらしい。だから男がどの娘を狙っているかの情報はすぐに入る。その情報は娘ののもとへ。もし、その男を娘も気に入っていたら、彼女はあわてふためいたふりをして捕らえられるが、嫌いな男と思えば翌朝草刈りにいくふりをしてそのまま遠い村へ逃げてしまう。男のほうは踏み込んで見たもののもぬけのから。一度失敗すると同じ娘には二度と結婚を申し込めないルールなので、他の娘につばをつけようということになる。この制度は人権を尊重した制度なのである。

http://www.a-kobe.com/mama/Nauro%20bihana5.html
カトマンズの風景

http://www.a-kobe.com/mama/diary/nepal1.jpg

ネパールにはたくさんの少数民族があるが、中でもマガールの女性は気が強く、女性の地位が高い。そのためいとこ結婚が多い。普通の娘が嫁にくれば姑問題がたえないが、いとこなら、かわいげがあるのでむごい扱いも出来ないからである。末息子は家に残らなければならない。なぜなら長男の嫁だと姑と年が近くなるので問題がたえない。末っ子とのほうが平和にうまくいくらしい。
族などによって違うが、マガール族は、若い嫁は、夫の兄が来ると何歩か前から自分を下座においてすれちがわなばならない。

ストーリー；ネパールで結婚式

ネパールの首都カトマンズ。
緑の田園風景が広がるカトマンズに、大地の恵みが農家を潤し、市場にはたくさんの野菜が並ぶ。人々が住むのは装飾の施された赤れんがの家。この豊かなカトマンズを作り出したのは唯一、都市文化を持つネワール族だ。「ネワール」とは、古くはカトマンズ盆地のことのみを示した「ネパール」からきているといわれている。このネワールこそ、この歴史を刻んできた人たちなのだ。盆地の先住民で独自の言葉を持ち、文化をも発展させてきた。現在も残る美しい町並みや、仏像や絵画などの伝統美術は、ネワール族があってこそ。カトマンズ盆地には、カトマンズ、パタン、バクタプルの３つの都市があり、周辺にはネワールの村が分散している。パタンは古くからの職人の町として知られ、金銀細工師大工職人の技術の確かさは伝統的なもの。各都市でみられる旧王宮建築は、ネワール芸術の集大成ともいえる。
ネワールは、仏教とヒンズー教の影響を二重に受けており、人々はどちらの神様もあまり区別せずにともに敬う。石に彫られた神様は居間に、町端に安置され、朝夕に供養される。ビルが建ち自動車が走り回っているが、郊外は静かなもので、緑の豊かさは変わらない。

１０月５日、７日に結婚を控えた私はネパールに旅立った。
式を挙げる前にネパールをたくさん味わうつもりだ。
ネパールで暮らすと言うことについては、まだ未定だが。
ネパールまでの経路。昼過ぎ、大阪の関西国際空港から直行便で上海経由を通じてカトマンズへ。約９時間あまり。昼頃に空港を出発すれば、夕方現地に到着する。１０月頃、東京では秋と言うところだが、ネパール、カトマンズは、と今日の温度より、８度から９度高いので寒すぎる心配はない。６月から８月頃までの３ヶ月間雨期で、毎日が雨の降りどうし。９月から５月にかけては、乾季で毎日が晴天だ。
１０月頃が一番適当な時期だろう。
旅の予算としては、飛行機の往復で１０万から１５万、ネパール通貨で１ルピー１．５５円、一日の生活費は、１０００ルピーから１５００ルピーくらいは必要だろう。旅日数をそれにかければいい。 ネパールは物価が安いので、節約すれば１０００ルピーもかからない。

夜６時ごろネパール、カトマンズに到着。
ほとんど何も無いような静かな場所だった。５０ルピーでタクシーに乗り、カトマンズの町へ。

少したつと、にぎやかな声と、音が聞こえてきた。カトマンズには、スーパーがいくつか立ち並んであるが、それだけでなく子どもから大人までが道端で、アクセサリーや化粧品、じゅうたん、日用品を売っている。そこはカトマンズのインドラ・チョーク。朝から夜まで人通りが絶えることはない。店がぎっしりと並ぶまち。
タクシーを降りて、インドラ・チョークを歩いてみた。日本で見る買い物の風景とは違っ

て、売る側も買う側もとても楽しそうに話しをしている。何かと見てみれば値段の交渉らしい。あらかじめ物の値段は決まっているが、ねぎれば、ねぎれるだけ安く物が手にはいる。日本では見る事の出来ないちょっと変わった風景。だが人々はその時を楽しんでいるかのようだった。
アサン広場、野菜などの露出店が並び、人々でいつもにぎわう。
アサン広場を出て、すぐ近くに現王宮→ダルバール・マルグがある。
現王宮に面した広い通りだ。５ッ星の高級レストランの他、土産物屋、旅行代理店が並ぶ。
インドラ・チョーク、アサン広場、ダルバール・マルグは、食べ物も、住む場所も全て揃っている。とても便利だ。
ダルバール・マルグの近くにまたホテルや、レストランが並ぶ、活気的なタメル地区がある。とにかく町はにぎやかで建物も鮮やかだ。
今日はタメル地区に泊まることにしよう。

翌朝、涼しい風と、部屋の窓から射した光で目が覚めた。
６：３０頃。少したってから、アサン広場などの市場に出向いた。
たくさんの野菜」が並び、すでに人々いっぱいだった。
今日は、カトマンズを存分に味わうことしよう。

どこまで歩いても懐かしい町カトマンズ。
市内には車やバイクが走っている、空にはジェット機までもが飛ぶ。
ひとつ角を曲るたびに、ひとつの寺院と出会うほど濃密な宗教空間。古い町の影とニュアンス。派手な色が全体に少ない色調は、遠い昔の日を思い出すかのようだ。

ネパールの象徴ともいえるお目めマークのお寺。スワヤンブナートというチベット仏教のお寺で、丘の上に大きなストゥーパがそびえ、その真ん中辺りにネパール独特のお目めが描かれている。

チベット仏教域であるが、ちかくには、ヒンズー教のお寺もたくさんある。

仏教もヒンズー教もともに敬う。

http://web. kyoto-inet.or.jp/people/mariposa/ngr07.html
アサン広場から、ダルバール広場へ。
みやげ物が立ち並ぶ露天商が多い所。そのあたりにたむろしている土産物屋は、そうとう

ふっかけてくるのでもし何か買うつもりならじっくり交渉することが必要だ。
お昼近く、いいにおいがしたので近く のレストランに立ち寄りネパール料理を味わうことにした。

http://member.nifty.ne.jp/~yu-ji/nepal/episode03.htm
かかせない料理ダルバート

ネパールの日常食は、ダルバートと言うあっさりしたもの。
ご飯、豆のスープ、野菜のおかず、漬物がセットになっている。
家庭では、じゃがいも、カリフラワー、青菜などの野菜のおかずが一品という素朴な料理だが、レストランではこのようなセットになったダルバートが食べられる。モモと言う、中国や日本の餃子と同じ形で蒸した蒸し物がネワールでは一般的によく食べられている。
ヨーグルトもある。
そんな時間を過ごしているうちに、もう夕暮れだ。一日だけでネパールのすばらしさを実感できた気がする。

結婚式の前夜を迎える。
衣装を仕立てなければならない。インドラ・チョークへ。
インドラ・チョークにはあざやかな衣装布がたくさんある。結婚式用はどれかと聞くと、赤いサリーというもの。サリーはインド女性の民族衣装であるが、ネパールでもポピュラーでよくみかける。素材によって値段に幅があるが、最高級のシルク物で１万ルピーくらい。普段着なら２００ルピーから。赤いサリーに刺繍が入ったものが、結婚式用だ。
サリーに合わせてブラウスもある。翌日には仕立てあがるそうだ。
またサリーと同様よく見掛けられるのが、クルタ・スワールという民族衣装。シャツとズボンの組み合わせで、ネパールでは若い女性がよく着ている。

翌朝、結婚当日。一時くらいからの予定だ。昨日頼んだサリーが仕立てあがっていた。とてもきれいだ。サリーを着ておでこに化粧としてすみのようなものを塗る。結婚式はヒンズー教のやり方。

新郎の家にいく。ヒンズー教は男の人を女の人がたてなくてはならない女は腰を低く。 家にはいった。赤茶の刺繍のはいった大きなじゅうたんが敷いてある。新郎の両親があぐらをかいて座っていた。私は新郎と一緒にその前に座りおでこをじゅうたんにつけて深くおじぎした。そして３歩下がった。ヒンズー教の教典を読み何かを唱えていた。数分後、読み終わると、新郎の両親が合図した。すると次から次へと料理が運ばれてきた。祭りや結婚式などに出てくる伝統的なネワール料理だ。
会話を楽しみながら時間が過ぎた。結婚式は早いもので、無事終えることが出来た。これからあいさつなどに回らなければ。
親戚の家にいって挨拶をした。暖かく向かいれてくれた。アクセサリーなどたくさんのものをくれた。しかしゆっくりもしていられない。あと３日で日本に帰らなくてはならなくなった。日本でも式を挙げるつもりだからだ。カースト制度のあるネパールでこれから暮らすという事は難しいが新郎の両親とネパールの温かさを感じる事ができた。

（7）　トルコへ、テレビ局の取材に行く

３年５組

http://popup.tok2.com/home/anatolia/kidtur/turmap.htm

「基本情報」

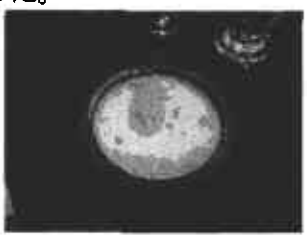
国名　　トルコ共和国
首都　　アンカラ
面積　　７７．２万平方 km
人口密度　　８２人／平方 km
通貨単位　　トルコ・リラ
宗教　　９９％がイスラム教
言語　　トルコ語
ビザ　　観光目的で三ヶ月以内の滞在ならばビザは不要
食文化　　トルコの料理は世界三大料理に数えられ、その種類の多さとおいしさは特筆に値する

「トルコにテレビ局の企画で食文化の取材に行く」

トルコに食文化の取材で行くという事でとりあえずトルコの首都「アンカラ」に行くことになった。滞在期間は一週間、メンバーは「カメラマン」、「照明」、「リポーター」、「雑用」各一人ずつ計四人という事でトルコに出発した。

トルコに着き、アンカラを目指した。アンカラはトルコの首都。1922 年、トルコ共和国を発足させた建国の父ケマル・アタチュルク初代大統領の霊廟がある。アタチュルクという名前のつく広場や通り、像はトルコ中にたくさんある。現代的なビルが建ち並ぶが街の北部には古い街並ぶ地区もある。

アンカラに到着して、取材と食事をかねてレストランに入った。そして料理を適当に注文してカメラをまわしてナレーションをいれながら食事をした。



http://satohiro.hp.infoseek.co.jp/Turkey/meal_2.htm

食事を終えて、アンカラにあるホテルへ向かった。そして次の日の為に早い時間に就寝した。

次の日になり、アンカラに住む地元の人のお宅にお邪魔してトルコの家庭料理を出してもらい、カメラをまわしてナレーションをつけながら食事をした。そして、カメラをとめて家の人にお礼を言ってホテルに戻った。ホテルで荷物をまとめて帰国した。予定より早い帰国となった。

（8）　南アフリカへ、友人の結婚式に行く

３年５組

『南アフリカ共和国～友人の結婚式～』

□基本情報□

首都：プレトリア／**面積**：１１２万３４１０平方キロメートル

人口：４３３４万人／**時差**：日本より７時間遅れ

位置と大きさ：アフリカ大陸最南端・日本の３．３倍

国土の３分の２を内陸高地が占め、高原、低高原、サバンナ、山脈、砂漠、半砂漠、森林、沿岸平野と変化に富んでいます。

気候：夏期は１０～３月、冬期は５～８月。国全体の平均気温は冬が０～１５℃、夏が２０～４０℃。

宗教：人口の８０％はキリスト教徒。

オランダ改革派教会、イギリス国教会、会衆派教会、メソジスト教会、カトリック教会、またキリスト教と伝統的アフリカ宗教が結びついた独立教会があります。多くのアフリカ人は伝統的な信仰を守り、アジア人の多くはヒンドゥー教、イスラム教を信仰しています。

歴史：オランダ・イギリスの植民地を経て、１９１０年に南アフリカ連邦として独立。

アフリカでは数少ない第二次世界大戦前からの独立国である。少数の白人が他の有色人種を差別するアパルトヘイト（人種隔離政策）が長く続いていたが、１９９１年に撤廃。１９９３年、全人種による選挙が行われ、初の国人大統領マンデラ氏が誕生した。金（世界第１位）・ダイヤモンドなど、鉱山資源が豊富、アフリカ大陸では工業化が最も進んだ国である。

主用言語：英語・アフリカーンス語

通貨：ランドＲ

１Ｒ＝１００ｃｅｎｔｓ（センツ）

１Ｒ＝約１４円

☆ストーリー☆

第1章「グローバルコミュニケーション？」

「なんでこんな場所にこなきゃいけないわけ…？」

成田から香港経由で、あたし「朝居 碧」は、南アフリカ共和国にあるヨハネスブルグというゲートウェイに着いた。

今回、何故こんなアフリカの最南端まで来たかというと、それは友人「友子」の結婚式のためだった。

３ヶ月ぐらい前に突然届いた結婚式の招待状。そこに書いてあった場所「南アフリカ共和国」。なんでも、友里子は南アフリカの奥地に住んでいる原住民と留学していた時に知り合い、この度結婚に至ったそうだ。

グローバルコミュニケーションの時代とはいえ、はっきりいって迷惑だった。

準備の段階から、友達「海音」と二人で「……めんどくさい」と愚痴っていたのだ。

それでも、仲の良かった友人のために準備は怠らなかった。

服（これは礼服と軽装）やガイドブック、カメラの購入、日常会話まで覚えて行く自分達に賛辞の言葉を与えたいくらいだ。「お元気ですか？」は「Hoegaand？」（フーカーンド？）。「元気です」は「Goed dankie」（グードダンガン）。「すみません」は「Ekskuus」（エクスカス）など…。この先二度と使うことのないこの会話を果たしてこの旅で使うのかどうかは謎だった。

しかしそんなことはどうでもよくなるほど、南アフリカは暑かった。日本と季節が逆になるたため、南アフリカは今春から夏にかけて…といった気候なのだ。

空港を出て、バスで国内を移動し、ケープタウン内にあるホテル「THE BAY HOTEL」へと急いだ。このホテルはランク５だというにも関わらず、ツインでＲ５０６。日本円にすると約７０８４円という格安ステキ値段なのでこのホテルに決定したのだ。

ホテルに着いた時にはもう既に遅い時間だったので、あたしと海音はチェックイン後そのまま爆睡へと走った。

そうして、南アフリカ一日目の旅は終わった。

第2章「てんとう虫のサンバ？」

二日目の朝は、海音のけたたましい奇声で起きた。

「朝居—！！！いい加減起きないと、ご飯食べる時間なくなるよ！？」

その声であたしは、「はっ」とした。

「ご飯食べる…」

もそっと起きて、旅行カバンに忍ばせておいた特製梅干と炊き立ての白米（もちろん、日本産「ひとめぼれ」）をがっつき、タクシー乗り場へと急いだ。

結婚式の会場まで約２時間。その間あたし達は、てんとう虫のサンバの振りを確認し

あっていた。
しかし、南アフリカのタクシーは中型のバスのようなもので、周りにいっぱい人がいたため、あたし達は奇特な目で見られていた。(涙)
そして、ちょっと笑いのとまらなかった道中を終え、会場へとついた。
結婚式は「人前式」というやりかただと、日本にいる際散々友子に説明された。
なんでも、人前式とはその名の通り、参列者(立会人と呼ぶ)の前で新郎新婦が結婚を誓うスタイルだ。神前式の神官や教会式の牧師さんがいないのが特徴。どの挙式スタイルでも結婚を誓うのは二人である。それを見届けていただく主たる対象が、神であるか、または二人にとって大切な人達(参列者)であるのかの違い。したがって、人前式はより現実的な結婚宣誓のスタイルといえる(らしい/友子談)。式次第は自由であるが、教会式に準じたものが多い。会場として、披露宴会場、別の部屋、ガーデンなどを使用する。ちなみに費用は基本的には、会場使用料と進行役の料金とで分かれる。進行役は式場スタッフやプロの司会者が行う(らしい)。友人などに依頼してもよいらしいが、結婚を誓う重要な式典なので、厳粛に行うことが大切(みたいだ)。
…って、誰に向かって説明してんだか…。ちょっとばかし、トリップしてたのか、自分!?
隣りにいた海音が、変な目で見てる…。うぅ…、ちょっとこれからは気をつけなきゃ(><;
そんなことをしている間に、式はそろそろ始まりを告げるみたいだった。
式場へ案内され、そして数分。
やっと式が始まった。
まず、南アフリカ共和国の国歌とも思われる曲が流れ出した。周りにいる、地元の人達はノリノリでその曲を歌っている。あたしと海音は顔を見合わせ、
「友子の趣味、疑うよね…」
とボソっとつぶやいた。
そして、二人の入場。
友子は、真っ白な原住民の衣装らしきものを着ていて、ぶっちゃけ「馬子にも衣装」…。
入場が終わった後、司会者により開会の辞なるものが始まった。(←プログラム参照)そこでは、人前式についての説明を延々聞かされ、あたしは夢の国1歩手前まで来ていた。
ようやく説明が終わり、その後立会人代表署名や結婚宣言、閉会の辞…などがスムーズに進み、披露宴へと会場は移った。
披露宴は日本式でやる、みたいなことを友子が言っていたので、これに関しては、そんなに不安というかなんというか…、そんな気持ちは無かった。
でも、問題は「てんとう虫のサンバ」がアフリカ人に通用するか!?だった(汗)
ボーっとしていると、ケーキカットの時間へとなっていた!!!(早っ)友子のムカツクぐらい幸せそうな顔を写真に撮った(もちろんこれは、後々友子を強請るための道具☆)。
そしていつのまにか、自分の出番がやってきた。

てんとう虫のコスチュームを着（恥）、あたしと海音はノリノリでてんとう虫のサンバを踊った。
退かれるかとおもったけど、何気にオオウケでビックリ☆他の友人達は、ソーラン節や盆踊りを披露。南アフリカからは原住民の祝いの踊りや歌を披露してくれた。（これが本当のグローバルコミュニケーション！！！）
原住民の方とも仲良くなりつつ、式はいつのまにか終わりを告げた。

夜、海音とホテルへ戻り、てんとう虫のサンバについての反省会をしつつ、この日は就寝。南アフリカ二日目を終えた。

第3章「出逢いは突然？」

三日目、あたし達は残りの時間を使って、観光をすることにした。行き先は喜望峰だ。
希望岬まではレンタカーで約３時間半。
出発の前に、ケープタウン内にある郷土料理店で腹ごしらえをすることにした。料理は、スパイシーなマレー料理を現地風にアレンジしたケープ料理（ケープ・マレー料理）だった。
「ねぇ、見てみて～♪この料理、ケープ・マレー料理っていうんだって！！」
あたしは、物珍しいケープ・マレー料理に感動して海音にその感動を伝えようとしたら
「バカ？ケープ料理とマレー料理を一緒にしただけじゃんっ！！！」
って突っ込まれた（涙）
「いや、でも、だってさっ！先住民たちにも伝統的な料理ってあるみたいだけど、家庭内でしか味わえないんだよ？こんな貴重な体験ステキじゃない☆」
って言い返してやった。
したら、
「じゃ、友子に作ってもらえばいいじゃん」
って返された…。
あたしって立場ナシ！？

そして、悲しい気持ちのまま、レンタカーで喜望峰へ向かい、海を眺めた。
喜望峰は、ヴァスコ＝ダ＝ガマがインドへいく途中に通り、有名になった場所である。
潮風に吹かれていると、なんだかお腹が空いてきた。
「ねぇ、海音…。そろそろ寒くなってきたし、ホテル帰ろっか？」
「そうだねぇ…」
そう海音が返事をしたあと、あたしのお腹が鳴った（恥っ）
「って、お腹空いたんでしょ？」
あたしは、バツが悪そうに「えへっ？」と笑って見せた。
そして、呆れられながらもまたレンタカーへと乗り、帰路へとついた。

ケープタウンに着いた頃には、もう既に夜１０時を回る頃。
ホテルにチェックインした後、自分達の部屋に戻ろうとした時、「Ｈｉ？」と声をかけられた。
「えっ？」
振り向くとそこには、類稀なる見目をもったステキな美青年が、海音の財布をもって立っていたのだ。
「あっ！！それ、私の財布…」
あたしは、ＮＯ●Ａに通っているので、少しだけ英語が話せる。なので、片言だけど、英語で話しをしてみようとした。
「Where did it pick up?」
「In front of the hotel.」
青年は、そう答え、海音に財布を渡した。
「…Thank you. You are to be a very kind person.」
「The unpleasantness. Only, it has an interest only to you.」
「What?」
「It is not what. By well this of me.」
「Thank you!!」
青年はそれだけいって、その場から去った。
そしてあたしたちは部屋へと戻り、就寝した。

第4章「さよなら？南アフリカよ」

そして翌日。
友子とその旦那に見送られながら、あたしたちは日本へと帰国した。
友子と旦那は、１ヶ月ほど南アフリカに滞在し、その後タヒチへと新婚旅行へ行き、３ヶ月ぐらいしてから日本に帰って新婚生活をするらしい。
その話を搭乗ゲートで聞いたとき、あたしは「んなら、日本で結婚式挙げろよ」と思ったことはいうまでもないだろう。
日本へ帰る途中、香港へよって食い倒れツアー実施後、成田へとついた。
自宅へ戻る途中、何かを忘れたような…という、感覚に陥った。
自宅へ帰って荷物を開けると、そこには、日本を出たときのままの姿をした旅行カバンがあった。
つまり、お土産を買い忘れたのだ（涙）
海音に電話したら、「あたしは買ったモンね☆」といわれ、本気で泣きたくなったのはあたしだけが知っていればいい話だ。
まぁ、３ヶ月もすれば友子も帰ってくるだろうし、その時にたんまりお土産をもらえばいいかな？

———３ヶ月後。

友子とその旦那が帰ってきたらしく、あたしと海音は引っ越し祝いで自宅へとおじゃました。

その時飾ってあった写真にあたしは少し驚いた。

何故なら、旦那の大学時代らしき写真に、海音の財布を拾ってくれた青年が写っていたのだ。

世の中狭いもんだ…。と心でつぶやいた。

ＥＮＤ

参考文献

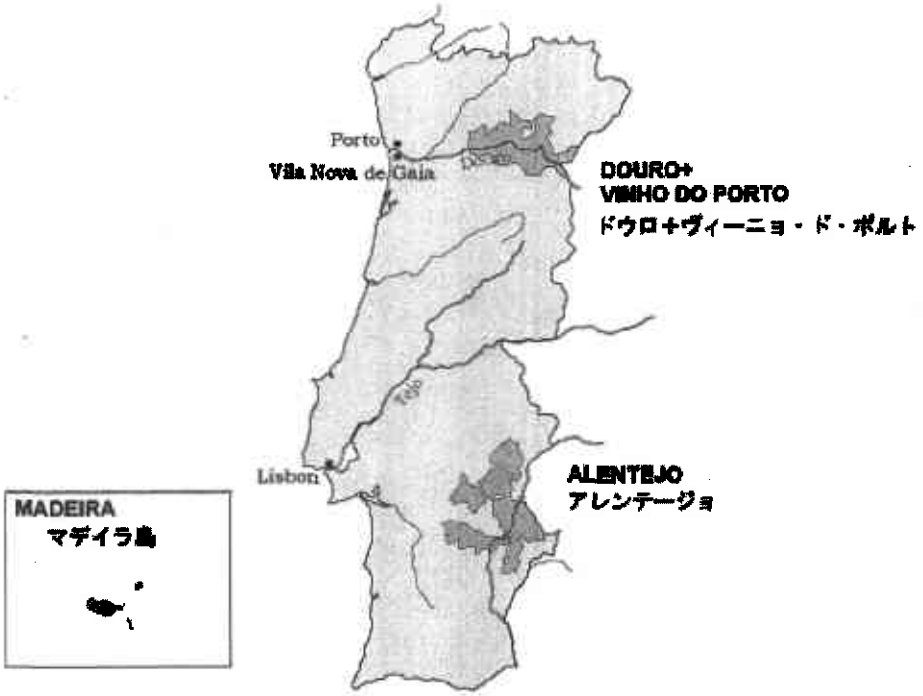
http://www.capecontact.com/photo12.html

http://netpassport-wc.netpassport.or.jp/wweddaid/ceremony.htm

http://abroad.travel.yahoo.co.jp/tif/country/ZA/

（9）　ポルトガルへ、現地の大学に留学する

3年5組



http://www.nlwine.com/wine/map/portugal.html

☆ポルトガルについて☆

国名;ポルトガル共和国
面積;9万2131km2
人口;1027万人('92)
首都;リスボン
宗教;カトリック 90%
言語;ポルトガル語
GNP;840億US$
政治形態;共和国
建国;1139年
通貨;エスクード
　☆1エスクード＝0，8円

行く目的「現地の大学に留学する。」

留学期間；１０月９日～５月３１日
ポルトガルの大学の数；ポルトガル大学・ミーニョ大学などがある。
授業の特徴；初級と中級の２クラスがある。初日にテストをしてクラス分けをする。中級の授業内容は、現代ポルトガル（の歴史）、ポルトガル文化、文法、ポルトガル文学の４教科。中級クラスは会話に不自由ない人達ばかりなので先生も気軽に喋っている。
寮について；寮は使わずにホームステイできる家を自分で探したり、大学側に紹介してもらったりする。
周囲の様子；ミーニョについては田舎。日本の田舎の村社会が存在していて、噂話がすごい。また、東洋人が少ない。
交通；リスボン空港から地方へのバスが出ている。
留学生の数；ミーニョ大学には日本人が少ない。
cantina（学生食堂）；大学に大きいのが一つあり、メニューは選べない。パン、スープ、ドリンク（ジュース）、その日のメインディッシュ（肉 or 魚、フライドポテト、ライス、サラダ）とデザート（フルーツ、プリン、アイスクリームなど）、以上で２５０エスクード。他に二つあるが、少し割高。学外にもカフェテリアがある。だいたい一人５００エスクード。学食よりおいしい。ポルトガルの食事は量が多く、油っこい。

☆ストーリー☆

平成１５年, 10月９日からポルトガルのミーニョ大学に留学する事を長い夏休み中に決め, ミーニョ大学の方に留学用の資料を請求した。ミーニョ大学を選んだ理由は，日本人が少ないからだ。資料が来たら記入し，ミーニョ大学に返信した。その時に大学にホームステイ先を紹介してもらえるよう，頼んでおいた。これをしておく事がとても大事！！現地に着いてからホームステイ先を探すのはとても困難である。

出発の日，実家から成田空港へ向かう。長期間家を離れる事は初めてなのでとても不安で楽しみとは言い難く，不安を募らせているうちに空港に着いてしまう。
成田空港で家族や友達とお別れの挨拶をして，ポルトガルのリスボン空港へ出発！！日本との時差はマイナス 8 時間なので，向こうに昼頃着くように出発した。

飛行機で寝てしまって気づいたらもう他の国。本当にポルトガルに着いてしまった。リスボン空港までホストファミリーの同年代の女の子、リタが迎えに来てくれた。

http://www.w-harimaya.co.jp/port2001/po2001_2.htm

リタの案内でリスボン空港からバスでミーニョ地方まで行った。リタと私は英語で会話をしていたが時々ちゃんと伝わっているか心配だった。留学する前に多少はポルトガル語の勉強をしたけれど，実践は難しい…。

http://www.fan.hi-ho.ne.jp/umetani/untitled1_001.htm

ミーニョの村は思っていたよりずっと田舎だった。そして，東洋人が少ない。
村の人たちにすごく注目された。

http://www.w-harimaya.co.jp/port2001/po2001_3.htm

リタの家に着いたらホストファミリーが快く迎えてくれて，いい人たちなのがすぐ分かって安心した。こちらの挨拶は初対面でも両頬に軽くキスをする。日本にはない習慣なので少し驚いたけれど，暖かさを感じた。リタは父・母・リタ・弟の４人＋犬１匹の家族た。以前にも日本人の留学生が滞在していたらしく，リタの両親はとても日本に関心を持っていて話し出したら止まらなかった。リタ，リタの両親と会って分かった事…。“ポルトガル人はよくしゃべる”。

一通り挨拶を終えたら部屋に案内された。思っていたよりも広くきれいでびっくりした。

それよりも困った事が一つ…。ヨーロッパでは家の中でも靴を履く習慣のあるもの。だけど、ポルトガルでは家族しかいない時には靴を脱ぐらしい。両親とリタは私を家族と見なしてリラックスしてくれたけれど、リタの弟のパウロは初めて見た日本人に警戒してか、遠くから見ているだけで、近づいても来ないし、靴も脱がない。その事態は夕食時まで続いた。どうやらパウロは、以前、日本人が滞在していた時はまだ赤ちゃんだったらしい。現在は5歳で、5月に誕生日を迎えるらしい。

ポルトガルの食事の時間は日本と大きく違う。日照時間の違いかもしれないけれど…。リタの話だと朝ごはんは余り食べずに昼は１時から。晩ごはんに至っては夜７時にレストランに入ってもスカスカ。８時だとまだ早いような感じで、９時～１０時半くらいが夕食のピーク。日本では７時くらいに夕食を食べていた私は待つのがちょっと苦だった。

初対面ということで夕食はとても豪華だった。けれどそれは私の誤解だったらしく、実はこれが普通の夕食。私はその量の多さにびっくりした。

http://www.fan.hi-ho.ne.jp/umetani/untitled1_003.htm

食事を終えた頃（１１時頃），リタに同級生から家の電話に電話があった。日本では普通，小さい子供がいる家には夜９時以降に電話するのは失礼とされるけれど，ポルトガルでは夜中でも平気で家の電話が鳴るらしい。もしかしたらポルトガル人は，とても時間にルーズなのかもしれない…。結局，ホストファミリーの誰よりも先に私が寝床についた。

次の日，いざ大学へ！コースの初日はテストをして，初級と中級の２クラスに分ける，という事をした。私は少し勉強をしてから留学をしたから中級クラスになった。中級クラスは会話に不自由のない人たちばかりのようだ。しかし，やはり日本人はいない。

その日のうちに，イタリアから留学してきたモニカと友達になった。モニカは私よりもポルトガル語が上手だった。午後になると，二人で学食（cantina）に行った。メニューは選べないけれど，やはり量は多く，パン・スープ・ドリンク（ジュース）・メインディッシュ（肉か魚，フライドポテト，ライス，サラダ）・デザート（プリン，フルーツ，アイスクリームなど）だった。その量で 250 エスクード。日本円で約 200 円！！安すぎる！！しかし，日本食に慣れている私の胃袋ではその量を食べきる事はなかった。

http://www.fan.hi-ho.ne.jp/umetani/untitled1_003.htm

他の日には，学外のカフェテリアに食べに行った。だいたい一人 500 エスクードで，やはり学食よりおいしい。

日にちも経ち，だんだん中級クラスの授業にも慣れてきた。授業内容は，現代ポルトガル（の歴史）・ポルトガル文化・文法・ポルトガル文学の 4 教科。
中級クラスでは会話に不自由がないため，先生もしゃべりまくっている。ただ，議論好きの先生がいて，授業そっちのけで議論をふっかけてきて授業にならなかった事もある。他の生徒から不平・不満もでていた。
私は，クラスで唯一の日本人だったので，先生方が絶えず注意を払ってくれていた。そのおかげでヒアリング力がついた。

10 月の終わり頃，リタの友達たちとリタの家でホームパーティーを開くことになった。こちらではホームパーティーをよく開くみたいで，リタに「日本ではやらないの！？」と，びっくりされた。リタが学校の友達も誘ってと言ったので，私はモニカを誘った。その日はいつも以上に豪華な食事が出てきた。そして，夜遅くまでみんなで騒いでいてとても良い思い出になった。

11 月に，ホストファミリーと一緒にリスボンに行く事になった。ミーニョとは雰囲気が少し違う都会の空気を感じた。どうやらパウロはケーブルカーに興味があるらしく，生き生きした表情でケーブルカーを見ていた。私も初めて見る乗り物にワクワクした。この時ばかりは、私を警戒していたパウロも一緒にはしゃいでくれた。

http://www.fan.hi-ho.ne.jp/umetani/untitled1_006.htm

リスボンは首都ということで，観光名所が多数あった。中でも私が気に入ったのはベレンの塔。日本では見られない様な建物を見ると，とても感動する。テージョ川の水上に立っている。

http://www.fan.hi-ho.ne.jp/umetani/untitled1_002.htm

「発見のモニュメント」前の世界地図「地上の地図は、この場所から見下ろして初めて全体像が理解できる。」

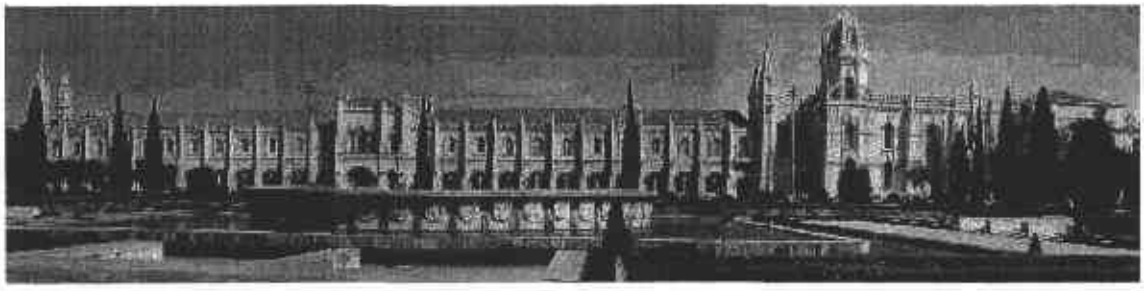
http://www.fan.hi-ho.ne.jp/umetani/untitled1_018.htm

サンタ-ジュスタ通りが一直線に見下ろしている風景。その先にはサン-ジョルジェ城の丘が真正面に見られる。

http://www.fan.hi-ho.ne.jp/umetani/untitled1_018.htm

リスボンの町並み、
サン-ジョルジェ城のライトアップされた勇姿。

http://www.fan.hi-ho.ne.jp/umetani/untitled1_018.htm



http://www.fan.hi-ho.ne.jp/umetani/untitled1_018.htm

「近距離から見るジェロニモス修道院よりも、ある程度距離を置いた方が格段に美しいことが分かる。」「３５ミリの広角レンズでは三枚に分けないと写真も取れない、それほどの雄大さ。」

このリスボン観光で、ホストファミリーと更に、信頼が深まったと思う。
そして、その夜に今度は小旅行に行こうと約束をした。

ポルトガルに来てからずいぶん月日が経って、髪が伸びた事に気づいた。だけど、まだまだポルトガル語が上手とは言えない私は美容院に行く事に不安を感じた。“もしも変な髪型にされたらどうしよう…”と考えたら、怖くてなかなか行動できなかった。

緊張しながら美容院に入った。さすがヨーロッパ！！お店の中はとても落ち着いた雰囲気でありながらオシャレな雰囲気も醸し出していた。

しばらく待つと美容師のお姉さんがシャンプー台に案内してくれた。シャンプーは意外とあっさり…というよりは日本に比べるとなんか雑。髪をぬらした後にシャンプーをボテッと乗せて髪と混ぜる様な感じでかき回していく。その間にもシャンプーのお湯が背中の方に伝ってくる始末。これから髪を切ってもらって良いのかすぐに不安になった。

シャンプーが終わった後のタオルドライも不十分で，髪からしずくがボトボト落ちながら鏡の前に案内された。
しばらく待っていたらさっきのお姉さんがヘアスタイルのカタログを持ってきてくれた。幸い，そのカタログの中に気に入った髪型があったので頼んだ。

出来は心配する事はなかったかも…。といった感じ。
値段は 6800 エスクード。それ＋美容師さんへのチップが 200 エスクード。だいたい日本と同じくらいの値段だった。ただ，やっぱり私には日本の美容院の方が良いなぁと思った。

あっという間に 4 月になり，来月の終わりには日本に帰国になってしまった。そこで，11 月のリスボン観光の時の約束の，小旅行を実行することにした。多分これがホストファミリーとの最後の思い出になるだろうなと思ったら，急に寂しくなった。

小旅行の目的地は，ポルト。

11 時頃に、ポルトに着いた。列車が到着したサン・ベント駅は、決して大きくはないけれど、壁面にアズレージョを張り巡らした素敵な駅だ。特に東洋から来た私にとっては、西欧の駅らしい雰囲気というよりは、異国情緒たっぷりという印象だった。

http://www2.gol.com/users/mijo/P02.viajes02.porto.htm

まずはボリャオン市場へ。生きたニワトリまで売っていると聞いていたので、楽しみだ。市場は大きな建物のはずなのですぐにわかると思ったのに、見つからない。それもそのはず、建物の壁を成す形で普通の商店が並んでいたので、それがひとつの建物になっていると気づかなかったのだ。良く見るとちゃんと入口がぽっかり開いていた。入るとまず八百屋がある。右手は魚屋が並んでいるらしい。左は肉屋かな？とりあえずまっすぐ行ってみることにした。少し行くと花屋が並んでいる。すごい数。いろとりどりの生花と造花と、それからドライフラワーもある。こんなにたくさんの花屋が市場の中にあるとは思わなかった。ポルトガルの人たちにとって花は生活に欠かせないものなんだろうと思った。

そしてついに発見！！！生きたにわとりが売っていた。ちょっとびっくりした。
ニワトリだけでなく、ハトやウズラやウサギまでも生きたものが売られていた。

http://www2.gol.com/users/mijo/P02.viajes02.porto.htm

次にドウロ川の対岸の町、ヴィラ・ノヴァ・デ・ガイアへ行こうとバス停へ行った。
バスはかなり細い道をくねくねと走り，ドン・ルイス 1 世橋の下の架橋を渡ってヴィラ・ノヴァ・デ・ガイアに着いた。

ポルトの街並みとドウロ川に浮かぶワイン船ラベーロが良く似合っていい眺めだ。ラベーロはワインを運ぶための小型の帆船で、かつては大活躍したそうだが、現在は、輸送にはもっぱらトラックが使われているので、船は観光用の飾り物となっている。

http://www2.gol.com/users/mijo/P02.viajes02.porto.htm

その日はポルトのホテルに宿泊した。夜はやはりリタとおしゃべりしながら過ごした。とても楽しい小旅行になって良かった。

この小旅行が終わってからはあっという間に月日が経ち，日本に帰国する日がやってきた。リスボン空港までホストファミリーが見送りに来てくれた。しかし，そこにパウロの姿がない。両親の話によると，パウロはサヨナラをするのがとても寂しくなってしまい，見送りには来れなかったらしい。最初は警戒されていたのに，いつの間にか彼は私に親しみを覚えてくれていたらしい。来てくれなかったのは寂しかったけれど，パウロの気持ちはとても嬉しく思った。私とリタは泣きながらサヨナラをして，家族とまたミーニョに遊びに来ると約束をして日本に帰った。

日本に帰国してすぐに家族に手紙を書いた。

（１０）ラオスへ、野生生物の生態調査に行く

３年６組

国名　ラオス人民民主共和国　(Lao People's Democratic Republic)

http://www.amateras.com/trip/laos/#s99

首都　ビエンチャン

人口　４９８万人

面積　２３万６８００平方キロメートル（日本の本州とほぼ同じ）

時差　日本より２時間遅い

言葉　ラオス語

気候　熱帯気候に属しているので、基本的には
１年中暑いが、
日中は、４０℃になる暑季（３月～５月）
雲が厚く、雨の多い雨期（６月～１０月）
カラっとして爽やかな乾季（１１月～２月）に分けられる。

通貨　キープ（Ｋｉｐ）　１ Kip だいたい 0,014 円くらい。
紙幣の種類は、20　50　100　500　1000　2000　5000
硬貨は、なし。

宗教　仏教　９８％で、寺院は約 2000 寺院ある。

民族　ラオ族ルム系　６０％、他６０種類。

地理　ラオスは、インドシナ半島北部に位置する南北１０００ Km に及ぶ帯状の内陸国で、ベトナム・中国・ミャンマー・タイ・カンボジアの５カ国に囲まれている。面積は日本の本州とほぼ同じで、そのほとんどは、アンナン山脈の山地が占めている。
原生林の中大きく蛇行しながら、メコン川は森の国ラオス１９００ Km に渡って流れる。全長４３５０ Km、チベット高原に源を発し、次第に水かさを増したメコン川は、タイ・ラオス南部では川幅が、１４ Km にも達する。さらにカンボジアを抜けて、ベトナムから南シナ海に注がれていく。

治安　ラオスは、社会主義体制をとっていて、政治活動や出版活動の取り締まり、夜間の市内検問も行われている。治安維持が重視されているため犯罪も少なく治安は比較的良好と思われますが、これはラオスが事件を公表しないため、少なく感じるだけのようです。

日本との関係　日本はラオスの最大援助国。
日本からの輸入品。　自動車（３０％）、一般機械（２３％）、電気機械（１９％）。
日本への輸出品。　製材（４８％）、丸太（１０％）。

日本～ラオスへ行くには。
＊飛行機の移動　日本からの直行便は無い。バンコク経由が、もっとも一般的。ベトナムのホーチミン・シティや中国の昆明を経由することも可。
＊船での移動　メコン川を往く船の旅が旅行者に人気。最もポピュラーなのは、北部のフアイサーイと古都ルアンパバーンを結ぶルート。

ラオスに野生生物の生態調査をしに行く。

７月下旬、学校が休みになり、自由課題を何しようか迷っていたが、クラスメートのラオスの留学生が“ラオスでは、生物の調査はあまりされていない”と言っていたことを思い出し、ラオスに行こうか考え、留学生に相談したところ、休みに帰るし、面白そうなので協力してくれるとのこと。

ラオスに行くことに決めた！

日本→ラオス

留学生と空港で待ち合わせ、まずはバンコクへと飛ぶ。バンコクでラオスの査証を取得しようと思っていたので、３０日くらいの査証が取れるか聞いてみる。所用３日か即日発給か？と聞かれたので、即日発給と答え、１５００バーツと写真２枚を渡す。ラオスへの飛行機に乗ろうとするが、一日一便のため、もう出てしまったらしい・・・。　今日はバンコクで一泊することにした。

今日はバンコク→ラオスへ飛行機で行く。
無事、ラオスのビエンチャン・ワッタイ空港に到着したが、野生動物がどこにいるのかもわからないので、ここで情報収集。ラオス語は、さっぱりわからないので、留学生（ワンディさん）にお願いすることに。
野生生物ではないが、国唯一の動物園が、ナム・グム・ダムの手前にあるらしい。何か情報が得られるかもと期待し、今日は、ビエンチャンのゲストハウスに泊まることに。

今日は、ムウァントラコム動物園に行く。この時期、ラオスは蒸し暑い。ポロシャツにズボンという服装で出かける。ワンディさんが、蚊がいっぱいなので、スプレーしたほうがイイと忠告してくれた。
トゥクトゥクの交渉もしてもらい、出発!!
途中、車が止まると、すぐに子どもたちが食べ物を売りに来た。彼女が持っているのは、カウラという餅米のお菓子だそうだ。おこわのようで少し甘めで、まずまずおいしい。ココナッツミルクで炊かれているみたい。

ムウァントラコム動物園に着く。思ったより田舎で、あまり客がいない。１０００kip（約１４０円）払い、入る。中には、鹿・猿・ワニ・鳥・白象がいた。係の人に聞いてみると、メインは白象らしい。
ここでも情報収集。すると、ラオスの南部にある中心的な町パクセー Pakse　校外では象が森の木の運搬などに駆り出されているという。さっそく明日行ってみることにして、今日は、ビエンチャンに戻る。

今日はあいにくの雨。６月～１０月は、雲が厚く、雨の多い雨期で道路事情が悪化して、通行困難になる場合もあるそうだ。なので、ビエンチャンにあるパソコンが使える店に行った。ここは、日本語対応で使いやすい。さっそくゾウについてネットで情報収集。

------ アジアゾウ ------
野生のアジアゾウの生体は、その生息地が深い森林であるためまだあまり明らかにされていません。広大な生息地域を必要とします。人間の居住地域拡大のため、個体群は分散孤立化しているのが現状。生息地は１３カ国で、ラオスは６番目に数が多い、との情報を得た。明日は、晴れますように。

と思ったが、今日も雨。
しかし、昼から、雨がやんだ。
ワンディさんは、今からじゃ無理だから、明日にしようと言った。地理に弱い私は、それに従い、自由行動となった。
ひとりでビエンチャン近くのメコン川を見に行くことにした。ちょうど、子どもたちがサドーンという網を使い魚を捕まえていた。「サバイディー」と声をかけてみる。すると、ひとりが網の中を見せてくれた。中には、２０ cm くらいの魚が三匹、あと、小魚やエビが数匹入っていた。

久しぶりの晴れ。さっそくパクセーへ出発。
長距離バスのルールは、客が集まり次第出発！ということらしい。早めにゲストハウスを出る。ビエンチャン～サバナケット、サバナケット～パクセー、計１６時間以上かかった。パクセーで宿泊。

昨日は流石に疲れたので、今日はのんびりすることに。象は明日探すことに・・・。

パクセーで情報収集。パクセー郊外とは、パーポー村・キェッゴーン村のことだった。行ってみると、ゾウの上に子供が乗っていた。村の人たちに聞いてみると、村で飼っているらしい。

大きさは、全長５．５～６．４ｍ
体重３～６ｔ
体高２．５～３．２ｍ というところだろう。
寿命は６０～７０歳。
何を食べているのかを聞いてみると、７５～１００種以上の植物を食べ、一日あたりの量は１００～２００ kg だという。成長や繁殖についても聞いてみると、性成熟に達するのは、１２～１５歳だが、メスが初めて妊娠するのは１５～１８歳。妊娠期間は２２ヶ月位で授

乳期間が２～３年と長く、一産一子。出産間隔は最短でも４年で、一生のうち多くとも７～８頭しか出産できないらしい。

と聞いたことを、ホテルに帰り、レポートにした。一枚完成!?

http://jp.yunnantourism.com/banna/ellephant_valley.htm

朝早くから起き、今日は二人でパクセーの市場に行くことになっていた。市場でも値段は交渉型だという。パクセーの市場には、魚も野菜も豊富にそろっている。メコン川の魚のこともあり、今度は魚を調べたくなった。ワンディさんも賛成してくれたので、またまた、情報収集。魚を並べている売り子の人にどこで獲れたのか？と聞くと、“リーピー”と言った。“リーピー”って？とワンディさんに聞くと、リンパミットの滝という意味で、その近くで獲れたものらしい。

せっかく市場に来たので、タイ風五平餅？焼きおにぎり？みたいな米の食べ物を買った。１個１０バーツ。薄味であっさりしていた。

さっそく、リンパミットの滝へ行ってみる。
まず、パクセー～南のコーン島へ。
パクセーから国道１３号線を南下。
船着き場から、フェリーに乗り、コーン島へ渡る。
コーン島のムアンコーンに到着。
外国人旅行者が泊まれる宿舎は、ここしかないので、ワンディさんには悪いが、ここに泊まる。

パクセーの市場で教えてもらったリンパミットの滝に着く。ここはラオスで最も豊かな漁場である。フナ・コイ・ナマズなどがいる。他にも、イルカが生息しているとのこと。イルカ!?よく見てみるが、全然見えない。以前は５０頭ほどいたが、今は１０頭位になってしまったという。姿は見せないんですか？と聞くと、乾季の１２月～２月の間しか姿を見せないらしい。残念。
ここではイルカのことを“パーカー”と呼ぶ。イラワジイルカは比較的臆病で、しかも短い嘴が他のイルカと違う。ラオスでは、イルカは神聖なもので、食用にすることはない。

コーン島のムアンセーンでは、毎朝５：３０から魚の売り買いが始まるという。岸辺に行ってみると、もうはじまっていた。
「今朝はどうだった？」ワンディさんが少年に聞いた。
「これだけ。」と言って、少年が手のひらを広げて見せてくれた。手の上には、小魚が２匹乗っていた。“ケー”という魚らしい。
少年と話していると、老人が話しかけてきた。２・３日溜めておいた“イアン”を持って

きたら、１kg ８０００ kip で売れたという。ウナギのことをこのあたりでは“イアン”というらしい。市場をのぞいていると、ナーという魚は２ kg ２万 kip で売られていた。市場の端のほうで魚を焼いている店を発見。イアンだ。
食べてみると、ドジョウの味に似ていた。
他にも、パジョウ・パパウ・パピアなどという魚がいた。

今日はすごい雨で移動は無理と判断。これからどーするかを２人で相談することとなった。結果、一週間程、自由行動にすることとなった。なぜならば、ワンディさんは、家に帰るという目的もあったことと、私は、もうすこしムアンコーンにいたいし、パクセーの市場ももう少し行ってみたいと思っていた。

今日、ワンディさんとわかれた。一週間後、パクセーのホテルで落ち合うことにした。
今日は、ちょっと田舎のほうへ行こうと思い、Tシャツ＆カーゴパンツで出発。ラオスでは、豚や鶏は放し飼い。普通に道で出くわすのでびっくり!?

http://www.snafkin.net/laos/lao-animal.htm

宿舎で朝食をとっていると、外国人らしき人が、明日はまた雨だ!!ラオスは雨が多い!!と言っているのが聞こえた。その言葉を信じ、今日パクセーに行くことにした。まずはフェリー乗り場に行かなければ!!と思い、ワンディさんが描いてくれた地図と言葉をたよりに進んだ。と思っていたが、なかなか目的地に着かない。方角もわからなくなった。しばらくうろうろと散策。ようやくトゥクトゥク発見。トゥクトゥクのおじさんにカタコト英語で話してみる。通じないみたいだ。ワンディさんに教えてもらった単語をメモを見ながらいってみる。発音が違うのか？連呼していると、何人か集まって相談を始めた。結局、トゥクトゥクのおじさんが、乗れ！とあいずしてくれたので、素直に乗り込むことに・・・。
やっとフェリー乗り場に着く。
車でパクセーへ。

今日は、やっぱり雨だった。昨日は、言葉の違いを思い知らされた大変な一日だったので、今日はホテルでゆっくりすることに。

今日は市場に出かける。
あいかわらず色んな物があった。
お腹がすいていたので、市場は素通りして、食堂街？みたいなところで、フーという麺類を頼む。ラオ・ラオもどうだ？と勧められているみたいだ。よくわからないので、やめておくというジェスチャーをする。後でわかったのだが、ラオ・ラオとは、モチ米が原料の焼酎で、フーは米で作った麺のことだった。

今日も市場に出かける。ここでは肉も売っていた。
鳥や豚などだ。犬肉と羊肉は見かけなかったが、他にも野生生物と思われるものがいた。
ムササビ、鹿、大トカゲ、リス、ネズミ、モグラ、ヘビ等々。
歩いていると、果物みたいなものが売られていた。なんだろう？と思い見ていると、１つくれた。手で割ってみると白い実が出てきて甘くておいしい。チョムチョムというフルーツらしい。他にもラオスには、色々な果物が売られていた。

玉子バナナ

ﾄﾞﾗｺﾞﾝﾌﾙｰﾂ

竜 眼

http://giechgroup.hp.infoseek.co.jp/laofruit/laofruit.html

今日はどうしようか。と思っていると、ワンディさんがもうホテルに来ていた。近くまで来たので、様子を見に来たらしい。自分の村に来ないか？と誘われた。私も特に調べることもないので、一緒に行くことにした。ワンディさんの村に行く途中、お互いの情報を交換していた。ワンディさんは、ヤシについて調べていた。

ラオスで栽培されているヤシは、ウチワヤシ・タラパヤシなどで村落に見られることが特色。特産の野生ヤシには、コーチビロウ・ラオスシュロチク・シンノヤシがある。フタバガキ科の樹木類・カリン属、シタン属などはかなり多くの種がある。ということは、ラオスは、降雨林型ではなく雨緑林の様相を示している。

今日はワンディさんの家でごちそうになる。モチ米とキノコの入った生姜味の惣菜、ケンカイという鶏のスープだった。結構おいしい。

今日は、ワンディさんの家の近くを散策。
ここでも豚が放し飼いになっていた。
家の近くで、ザル？があった。何か上にのっている。干しているみたいだ。これは？と聞くと、これはオーヘットというキノコの一種らしい。昨日食べたものか・・・？
キノコを取りに行くというので、ついていくことに。
いろいろな種類のキノコが採れた。

ツルタケ

タマゴタケ

スエヒロタケ

ツノマタタケ

http://giechgroup.hp.infoseek.co.jp/kinoko/picetc.html

ワンディさんの家の近くでは、焼き畑が行われていた。陸稲作りが中心らしい。
ラオスではモチ米が主食であるが、モチ米のことをカイニャオと言うらしい。
他にもイモ類、ヘチマ、カボチャ類、バナナやランブータン、ドリアンといった果物を作っているみたいだ。気温が高すぎるこの村では、経済的豊かさをもたらす商品作物は、栽培不可能らしい。

とうとう明日、日本に帰ることとなった。不明な点も多少あるが、ラオスで知った魚やカシなどを、研究レポートに書こうと思う。

参考文献

シャンティ２０００ ― 南ラオス・山河紀行　― 神秘なる自然と伝説の旅
発行人　松永然道　　発行　社団法人シャンティ国際ボランティア会

（１１）ハンガリーへ、現地の芸術を学びに行く

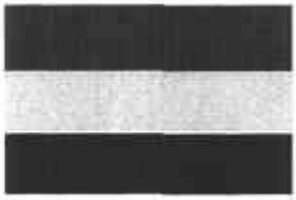
３年６組

プロジェクト 『よそ国♪』基本情報

☆ハンガリー編★

1国名：ハンガリー共和国

ハンガリーの国旗



18 世紀頃つくられたといわれ、1949 年にハンガリーが人民共和国となったとき、国旗の中央にハンマーと小麦の紋章をつけたが、1956 年のハンガリー動乱の後憲法が改正され、紋章が除かれた。赤：血、白：清潔、緑：希望を表す。

首都：ブダペスト
面積→ 93,033 平方キロメートル （ヨーロッパ全面積の１％）

人口＝１０１３万（１９９８年）
民族→ドイツ人、スロベキア人、クロアチア人、ルーマニア人
スロベニア人、ジプシー、など。
宗教→キリスト教（カトリック、プロテスタント、）ユダヤ教、ギリシャ正教など。

4言語：ハンガリー語（マジャル語）・・・・公用語はマジャル(ハンガリー)語で、
東方のウラル語系フィン - ウゴル語派に属するアジア系の非ヨーロッパ言語。
5気候：温帯
6歴史：
7社会状況：
8産業：機械類、衣類、肉類など。
9政治：議会制共和国、一院制
１０：通貨 フォリント（forint）
１１：食

<ストーリー>

指揮者の僕には長年の夢がありました。それはハンガリーで音楽の勉強をして、首都で三年に一度開催されている「ブダペスト国際指揮者コンクール」に参加する！と言うことでした。 その夢をかなえるためにハンガリーに留学することになりました。
赤ちゃんのお尻に蒙古班があるなど、なにかと日本と関わりが多いハンガリーですが。移動には、ハンガリーには飛行機の直行便はないので、まずドイツまで飛行機で行って、そこから国際列車を使ってドイツ～オーストリア～ハンガリー経由で、やっと「音楽の国」ハンガリーに入国しました。 とりあえず僕は首都首都のブダペストに滞在し、情報収集をすることにしました。住む所は、ハンガリー人の音楽仲間の家に下宿させてもらうことになりました。

↑ブダペストの風景

ブダペストの街をうろつくと、大きな中央市場がありました。どうも市場らしくないのですが、なかなかな賑わいでした。結構ゲテモノ食いのハンガリー人、豚足や鶏が丸ごと並んでいるのは当たり前、クリスマスの前後のフライング・ターキーや、皮をはがれたブタの顔にはぎょっとします。

↑吊るされるブタの図

この街には壮大な建物や中世ヨーロッパを思わせるよう壮大な建物や建造物が多数存在しています。ブダペストだけでなくハンガリーの顔、国会議事堂や、あの有名な楽曲「美しき青きドナウ」などで有名なドナウ川にかかるくさり橋、夜景は最高でした。

↑国会議事堂

↑くさり橋

↑英雄広場

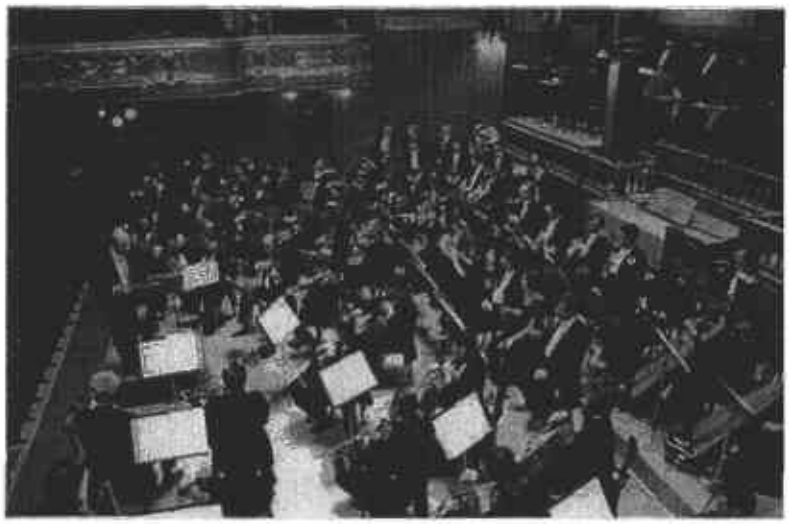
ほかにも有名な観光スポット英雄広場などを見て回ると、どれもこれも素晴らしくハンガリーに来ているんだなぁと実感し、感激しました。

そして、ハンガリーの音楽のメッカと言われる「ハンガリー国立歌劇場」の前に来ました。「いつかここのステージに立ってやる！」と意気込みその日は帰りました。

ハンガリー国立歌劇場→

ところでこの「ブダペスト国際指揮者コンクール」に参加するには、コンクール委員会指定の場所に集合し、最も若い参加者が始めにくじを引いて演奏順を決める。その後本選までの演奏順は全て、その最初の演奏者から名前のアルファベット順（降順）に演奏することになる。二次予選には12名、本選には6名のみが進むことができ、上位3位までの入賞者（及び大衆賞受賞者／この 3 人以外からの選出の場合も可）がガラコンサートでの演奏ができることになっている。

という基本ルールがあることを知り、さっそくエントリーをしました。第一次予選は難なく突破したのですが、問題は第二次予選でした。第二次予選はオーケストラと合わせる形になるのですが、何せよリハーサルをやる時間が極端に少なく、時間ぎりぎりでリハを終わらせましたが、やはり時間不足で満足の行くものではありませんでした。しかしこれを突破しないと憧れの「ハンガリー国立歌劇場」のステージに立てない。ところが「ええぃ！ままよっ！」と開き直って指揮をしたのが功をそうしたのか、自分の思った以上の演奏ができ、なんと本選に出場が決まりました。



白熱のコンクールの様子↑

そしていよいよ憧れの舞台に立てる日がやってきました。課題曲はハンガリー人の作曲家バルトーク作曲の「舞踏組曲」でした。幼い頃からの夢だったハンガリー国立歌劇場でのタクト。指揮しているときはもっと緊張するかと思っていたのですが、憧れのステージに立てた喜びと、純粋に指揮をしている楽しさで時間はあっという間に過ぎてしまいました。残念ながら優勝は逃してしまいましたが、昔からの夢をかなえることができ、とても素晴らしい経験ができました。やっぱり夢は見るものじゃなくってかなえるものなんだなと思いました。

http://w3.datanet.hu/~szagami/budapest/ab-bud-arukikata.htm
http://w3.datanet.hu/~szagami/budapest/ac-bud-arukikata002.htm
http://www.jpnhun.org/hungary/
http://www.japanarts.co.jp/html/world2002/orchestra/Budapest.htm
http://www1.neweb.ne.jp/wb/mitaniaj/MEO/MEO.html

一年間をふりかえって

最初にこの授業記録を作成した際、授業をやった者としての感想等が入っていないことを指摘された。確かに、個人的な要素は重視していなかったために、すっかり忘れていた。とはいえ、今後に取り組んでいく人たちに何らかの参考になるかもしれないので、授業計画の後に、背景や感想、時には反省などを付けくわえたものが、この第二版である。

参加型学習と呼べるものをやりたいと意識しながら、一年間の授業を展開してきた。記録からは、一見、楽しい授業のように思えるかもしれない。生徒にも、楽しい授業作りを心がけているのだろうと思われていたふしもある。しかしながら、自分では、楽しさを目指していなかったし、たいして意識もしていなかった。その場限りの面白さはどうでもよく、大切なのは何が生徒に残っていくかであったので、生徒が肝心の要点に意識を向けてさまざまに考えられるようにとの工夫ばかりしていた。それでも、生徒のコメントを読むと、かなり楽しんでくれていたようである。これは、テーマに生徒自身が集中できたからそうなったのであり、いいかえれば、生徒は自分たちで自主的に楽しんだ。あくまでも、楽しさは結果としてついてくるものであって、先にそれを求めないほうがよいのではないだろうか。似たような意味で、生徒から学んだとか、元気をもらったなどのアマチュア的なセンチメンタリズムもなるべく排除してきた。授業は生徒たちのためのものであり、一方で参加型学習ならばファシリテーターもひとりの参加者となるので多くを学ぶのは当然といえる。

自分の個人的感覚・感傷を安易に混ぜ込ませないように意識したのには、大きな理由があった。それは、平和を目的とした教育が備えるべき“普遍性”を重視しようとしていたためである。現在では、平和というものは、個別・地域別では成り立たないといわれている。全体で共有しなくては、つまり普遍的でなくては、持続性がないと考えられる。したがって、生徒たちにも、普遍的な何らかの価値観を感じ取り、自分のものとしていくことができるようなプログラム作りが、我々の課題であると考えた。

しかしながら、そこでは、「平和のために必要な普遍的価値観とは、何を指すか」を具体的に示す必要も発生する。この点において、試行錯誤の結果、選んで軸に据えた概念が、「人権の普遍性」であった。一年間のさまざまな学習活動は、このことを学ぶためにあったということができる。この授業記録に特徴があるとすれば、おそらくは、「普遍的人権」を軸に選び、そこに集中して一年間を展開したという点にあるだろう。

はたして、そのように巨大なテーマが、生徒たち個々の心の中に、この授業で彼らの個人的なものとして根付かせることができたのか、それは明らかではない。そもそも、元々健全な感覚を有していた生徒は授業を受けなくても充分に健全なはずだから、検証は難しい。ただ、表面に現れることはなくとも、なんらかの良い影響が心の底に残り続けていってくれるなら、授業として間違ってはいなかったといえるだろうし、そうあってくれることを心から願っている。

参考書籍・問い合わせ先について

「国際理解」のような授業をする際には、どうしてもいろいろと情報を集めたり勉強したりする必要があります。生徒の何倍も学んでいるような気がしました。

とりあえず、手元にある本のうちで、何度も読み返しながら計画を考えていたものや、授業に直接利用したもの、またはこれから授業を考える人の参考になりそうなものをいくつか挙げておきます。

＜書籍＞

1）グラハム・パイク、ディヴィッド・セルビー共著　「地球市民を育む学習」
明石書店　1997

2）グラハム・パイク、ディヴィッド・セルビー共著　「ヒューマン・ライツ」
明石書店　1993

3）開発教育推進セミナー編　「新しい開発教育のすすめ方」
古今書院　1995

この三冊は、グローバル教育についての概念をふりかえりつつ、どのような学び方を生徒にさせるかと考えるために、読み返していました。

4）日本ユニセフ協会　「開発のための教育　ユニセフによる地球学習の手引き」
（財）日本ユニセフ協会　学校事業部　1994

手元にあるのは、パイロット・バージョン、つまり試作段階のものです。
実際に発売されたものとは多少の違いがあると思います。
さまざまな活動事例と教材が集められた本です。

5）マテリアル・ワールド・プロジェクト　「地球家族　世界３０か国のふつうの暮らし」
TOTO 出版　1994

写真集です。実際に授業でも使いましたが、この本を眺めながらアイデアを練っていたりもしました。

6）浅川和也、柏村みね子編著　「見つけた!!　教材の素　NGO と作る英語の授業」
メディア・ポート　2002

これは、NGO にあまり馴染みがない方には参考になる一冊です。

＜ホームページ＞

開発教育協会(DEAR)　http://www.dear.or.jp

国際協力NGOセンター(JANIC)　http://www.janic.org/home.html

日本ユネスコ協会連盟　http://www.unesco.or.jp

国際協力事業団(JICA)　http://www.jica.go.jp/Index-j.html

国連食糧計画日本事務所(WFP)　http://www.wfp.or.jp

国際理解教育学会　http://www.2.ocn.ne.jp/~kokusaig/framepage1.htm

国際理解教育センター(ERIC)　http://www.try-net.or.jp/~eric-net/

ヒューライツ大阪　(財団法人アジア・太平洋人権情報センター)
http://www.hurights.or.jp/index_i.html

(財) 日本フォスター・プラン協会　http://www.plan-japan.org/

ピースウィンズ・ジャパン　http://www.peace-winds.org/jp/main/index.html

アムネスティ・インターナショナル日本　http://www.amnesty.or.jp

総合的な学習　試行
2002年度　三年生選択講座「国際理解」授業記録

この記録に関する問い合わせ先：

東京都立 久留米西高等学校　中山 滋樹
e-mail address : alex@ac.mbn.or.jp